２０２４．３．３１（日）Ｉコリント１５：１～５

15:1　兄弟たち。私があなたがたに宣べ伝えた福音を、改めて知らせます。あなたがたはその福音を受け入れ、その福音によって立っているのです。
15:2　私がどのようなことばで福音を伝えたか、あなたがたがしっかり覚えているなら、この福音によって救われます。そうでなければ、あなたがたが信じたことは無駄になってしまいます。
15:3　私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、
15:4　また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、
15:5 また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたことです。

＜説教＞

本日は復活節（イースター）です。今からおよそ 2000 年前の金曜日の午後に十字架につけられて死なれ、墓に葬られたイエス･キリストはそれから三日目の日曜日の朝早くに確かによみがえられ（復活され）ました。本当に神の御子である（即ち神である）イエスは、本当の人間、つまり、霊と肉体（からだ）を持った人間としてこの世に来てくださいました（それがクリスマスの出来事です）。そのイエスが十字架に架けられ死なれ、墓に葬られ、そして復活なさいました。コリント人への手紙第一（Ｉコリント）15 章で使徒パウロはそのイエス･キリストの十字架の死と復活こそが〈福音〉（良い知らせ）の中心であることを語り、続けてキリストの復活の決定的重要性を語っています。

イエスの復活について語る前に、〈改めて〉〈福音〉を知らせるとパウロは言います(1)。そのとき、コリントの教会の人々がパウロから聞いて信じた福音の中心、原点を忘れかけていたからです(2)。それで教会の中に〈死者の復活はないという人たちがいる〉ということが起きていました(12)。それでパウロは自分がコリントの人たちに〈最も大切なこととして伝えた〉福音、コリントの人々が信じて救われた福音の中心的内容を〈改めて知らせ〉ようと言うのでした(3-5)。それは今日の私たちも同じく、〈救われ〉るために、聞いて、〈受けて〉信じるべきイエス･キリストの福音です。

その福音の内容は、第一が〈キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと〉、つまり十字架の死です。第二が墓に〈葬られたこと〉。第三が〈聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと〉、つまり復活です。そして第四が〈ケファに現れ、それから十二弟子に現れたこと〉です。第二の「墓への葬り」は第一の「死」が本当の死だったことの確かな証拠でした。また、第四の、ペテロを始めとする弟子たちの前に、そして更に多くの人たちの前に（6,7)復活のイエスが現れてくださったことは、イエスが本当に肉体をもって復活なさったことの確かな証拠でした。イエスはこの人々を力づけ励まし、こうして彼らが力強く初代教会を形成して行くようになさいました。そのように見ると（始めの方で見たように)、福音の中心はイエスの十字架の死と復活だと言えます。それは、イエスの十字架の死と復活についてここで特に〈聖書に書いてあるとおりに〉とあることからもわかります。このときのパウロが言った〈聖書〉とは旧

約聖書のことです。イエスの十字架の死と復活は偶然の出来事ではありません。それは旧約聖書に記され預言されていたことの成就、つまり神の約束、計画の実現でした。そのことが新約聖書にも福音として記され、語られ宣べ伝えられているのですから、旧新両約聖書全体の中心、福音の中心がイエス･キリストの十字架の死と復活だと言って良いのです。

そういうわけで、イエス･キリストの十字架の死と復活が、〈最も大切なこととして〉私たちに〈伝え〉られている〈福音〉の中心です。問題は、私たちがキリストの十字架の死と復活をどのように受け止めるかです。歴史的現実的事実として〈その福音を受け入れ、その福音によって立っている〉かどうかです。伝えられた福音を信じ、福音を人生の土台として生きているか。更には一度受け入れ信じた福音を〈しっかり覚えている〉か、〈信じたことは無駄になってしまう〉そんな軽い、不真面目な、本気でない、いいかげんな、キリストを侮るような､また人にもキリストを侮らせるような信仰生活になっていないか、常にキリストの前に問いつつ生きているか。自分の不信仰、信仰生活のいい加減さ、不真実さをキリストの前に悔い改めつつなおもキリストに寄りすがり、信頼し、従っていきたいと真剣に願い、神に乞い願い祈り生きているかどうか、それが問題です。

イエス・キリストの十字架の死、それは〈私たちの罪のため〉の〈死〉でした。罪とは要するに神のみことばに、ご命令に従わず、逆らい、自分の好きなように考え、語り、行うことです。自分だけを愛して他人も神も愛さないことです。それは最初の人アダムが犯して以降、この地上に生まれて来る全ての人（もちろん私たちも）が生まれながらに持っており、日々犯している罪です。そんな神への不従順、反逆罪に対する神の怒り、呪い、さばきが私たち人間の〈死〉の本質、正体です。そうして死んだ後、神に永遠に見捨てられて地獄に行かなければならない、それが私たちが受けるべき罪の報酬です。そんな私たちの救い主として神は御子イエスを人としてこの世に送ってくださいました。罪を生涯一度も犯さなかった「義人」イエスが、私たちの全ての罪をご自分の身に背負ってくださり、私たちの身代わりに十字架に架かり、神に見捨てられられて本当に死なれ、私たちが永遠に受けるべき神の刑罰を完全に受け尽くしてくださいました。イエスを信じる私たちのすべての罪は、十字架で流されたイエスの血によって洗われ、取り除かれ、赦されます。てイエスの「義」を頂き、「死んでも生きる」（ヨハネ 11:25）永遠のいのちを頂き、地獄の滅びを免れ、天国の国籍を頂くのです（cf.ピリピ 3:20）。それが〈私たちの罪のため〉のイエス・キリストの十字架の死でした。

そのキリストが〈三日目によみがえられ〉ました。イエスは人間として「からだ」肉体をもって復活なさいました。〈ケファ〉その他弟子たちの目の前に現れたのは幽霊としてではありませんでした。先に見たように、イエスは私たち罪人の罪のために、私たちと同じ人間として（罪は別として）一度死なれました。私たちの全ての罪をその身に負われて十字架で一度死なれ、私たちが永遠に受けるべき神の刑罰を身代わりに受け終わった後、もう二度と死ぬことのない、永遠のいのちを持つからだをもって復活なさいました。それはやがて来る神の最後の審判を受け終えた、それ故その最終審判に耐え得る、完全な「義人」として、永遠のいのちとからだを持つ人間としての復活でした。そんなイエスの復活によって、イエスが本当に「生ける神の子キリスト」（マタイ 16:16 他）だということが明らかになりました。イエスが罪と死に打ち勝たれたことが明らかになりました。確かにいくらイエスが私たちの罪のために死なれたと言っても、もしイエスが復活せず、死んで

それで終わりだったら、結局イエスも死には勝つことはできなかったことになります。ならばイエスは私たちを罪と死から救うお方ではあり得なくなります。また、イエスを信じる者に「死んでも生きる」永遠のいのちとからだを与えることはできないでしょう。私たちは死後、神のさばきの座（ヘブル 9:27）で、最終審判の座でイエスの義を頂いた義人と見なしていただくことはできません。〈もしキリストがよみがえらなかったとしたら、あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今もなお自分の罪の中にいます〉（15:17）とすぐ後でパウロは言います。イエスが復活なさったので、私たちの罪のためのイエスの十字架の死が、イエスの地上の生涯の全てのみことばが、みわざが真に意味あることとなりました。そのイエスを信じる私たちの信仰と生活が、すなわち「自分を捨て、自分の十字架を負ってイエスに従う」人生が意味あるものになりました。もはや罪の結果の死を恐れ、死後の神のさばきを恐れ、また人を恐れて生きる必要がなくなりました。イエスは私たちを罪と死から救い、私たちにご自分の復活のいのちを与えるために死に、復活されたのです。